

## 第4回国際マヤ学者会議に参加して

佐藤 孝裕

Report of the 4th International Congress of Mayanists

Takahiro SATO

1998年8月2日から8日にかけて、中央アメリカのグアテマラのアンティグア市で、第4回国際マヤ学者会議 (4° Congreso Internacional de Mayistas) が催された。筆者は前回から招待を受けるようになったのであるが、前回は諸般の事情で参加できず、非常に残念な思いをした。それだけに、初めての参加となる今回は、意欲も期待も非常に大きかった。以下に、この会議への参加報告をしたい。

この機会を利用して、先ずマヤ低地南部の熱帯雨林地帯にある三つの遺跡、ティカル、ワシヤクトゥン、セイバルを訪れた後、グアテマラ高地に位置するアンティグアに向かった。フィールドから暫くの間離れていただけに、短期間とはいえ遺跡に触れたことは、現場感覚を甦らせる上で大いに役立った。

会議が開かれたアンティグア市は、字義通り<sup>1)</sup>グアテマラの古都である。正式には、アンティグア・グアテマラといい、1543年3月10日に建設された。それ以後1773年7月29日に大地震で破壊されて、1776年に現在のグアテマラ市に遷都するまで、233年間グアテマラの首都であった。数多くの教会の遺跡があり、又いかにも古都らしい落ちついたたたずまいがあるせいで、現在では国の内外から多くの観光客が訪

れるようになっている。

大会は、アンティグア市街地の東のはずれにあり、修道院を改造してできた高級ホテルであるオテル・カサ・サント・ドミンゴを本部とし、全体会もここで催されたのであるが、分科会に分かれての研究発表は全て、ほぼ町の中心部に位置するエディフィシオ・デ・コンパニア・デ・ヘススで行われた。

ここで、国際マヤ学者会議とは何かについて触れておきたい。今回で第4回目を迎える同会議は、メキシコ国立自治大学のマヤ研究センターが主催してきたもので、世界中のマヤ文明の研究者が一堂に会し、研究発表をする大会である。1985年に第1回が催され、以後1987年、1989年、1994年と、数年おきに開催されており、今回はグアテマラの文化スポーツ省と人類学歴史学研究所との共催であった。開催される度に規模が大きくなると同時に、そこで扱われるテーマもより多彩になってきている。今回の大会では43の分科会に分かれ、発表者だけでも延べ300人余を数え、マヤ学についての会議としては、文字通り世界最大の規模を誇っている。その内容については、資料1を見れば明らかのように、時代的にも先史時代から現代まで、又学問分野の点でも、考古学、歴史学、文化人類学から、ジェンダー、言語学、文学、経済学、法律学、芸術などと極めて多岐に渡っている。参加者の大半が、マヤ地域を含むメキシ

1) アンティグア Antigua は、スペイン語で「古い」という意味。

コやグアテマラの研究者であったが、その他にも米国やヨーロッパからも多数の研究者が参加しており、正に国際的な会議であった。日本人研究者としては、大越翼（メキシコ国立自治大学、エスノヒストリー）、初谷譲次（天理大学、エスノヒストリー）、鈴木紀（千葉大学、文化人類学）、吉田栄人（静岡大学、文化人類学）、猪俣健（イェール大学、考古学）、青山和夫（茨城大学、考古学）、桜井三枝子（大阪経済大学、文化人類学）の7氏が発表者として、そして池田光穂（熊本大学、文化人類学）、児島英雄（メソアメリカ学研究所、民族学）と筆者の3人が聴講者として参加した。

今回の統一テーマは、「Identidad Maya」、すなわちマヤ・アイデンティティであった。これまで「マヤ」あるいは「マヤ人」という言葉が、その意味を深く問われることなく、自明のこととして一人歩きしてきたことを考えれば、今ここで「果たしてマヤとは何か」を問い直すことは極めて重要であり、又必要なことだと思われる<sup>2)</sup>。しかし、この問題提起がうまく作用したかと言えば、疑問に思われる。7～8もの発表が同時進行で行われたので、筆者自身が直接傍聴できたものは極めて限られたものに過ぎないが、それでも「マヤとは何か」を本質的に問う発表はなかったように思われる。

特記すべきこととしては、日本人研究者が組織したシンポジウムも行われたことが挙げられる。「民族の境界の再現」と題して、桜井三枝子氏が、「グアテマラにおけるマシモンとサン・シモン崇拜—民族の境界を通過の往復—」、初谷譲次氏が「ユカタンのカスタ戦争期前の時代（1821-1847）における罪についての民族的様相」、吉田栄人氏が「宗教的シンクレティズムにおけるマヤーユカテカ・マヤ人の事例—」、鈴木紀氏が「本質主義と保守主義—ユカタンのマヤ人の民族組織の政治的戦略—」

2) かつて筆者は、現在のマヤ人自身が自分たちをマヤ人という大きな民族集団に帰属していると自覚しているか疑問である旨を指摘した。佐藤孝裕「民族に関する一考察」『別府大学短期大学部紀要第14号』p.89, 1995

について報告した。

様々な分科会に参加して感じたことだが、3年前に参加した第60回米国考古学会に比べ、質疑応答が非常に盛んだったのが印象的であった。これは先述した日本人が組織したシンポジウムにおいても同様であった<sup>3)</sup>。それから、発表者のほとんどが、大学か研究所に勤める研究者であったということも、米国考古学会や日本の学会とは異なる点として挙げられる。

筆者自身は、今回は聴講者として参加したのみにとどまり、発表はしなかった。それだけに、メキシコ国立自治大学の大学院博士課程在学中以来の先輩であり、今回の大会の組織委員でもあった大越氏から別れ際に言われた「次は君にも発表してもらおうからね」の言葉が、重くのしかかった。果たしてこのような大規模な国際的学会で発表できるほど研究が進むであろうか。最新の研究成果を知り、又様々な研究者と議論することを通じて大いに刺激を受けたという点で、多大な収穫を得ることが出来たが、それと同時に大きな宿題を背負わされることになった大会参加であった。

資料1 第4回国際マヤ学学会議における研究発表の題目(抄)<sup>4)</sup>

[8月3日]

[シンポジウム：ユカタン北部の考古学]

1. ユカタン北部の遺跡についての文献資料
2. ユカタン北部の平原
3. イサマル遺跡調査計画の進展と見通し
4. ユカタン州アカンケー遺跡の調査と復元に関する近年の作業

3) 次の鈴木氏の報告を参照。鈴木紀「第4回国際マヤ学学会議（4° Congreso Internacional de Mayistas）」『日本ラテンアメリカ学会会報No.67』1998, pp.2-3

4) 7つの部屋で同時進行の形で分科会が開かれたので、筆者が実際に聴取したものは非常に限られている。従って、題目に変更があったものや、都合で発表が行われなかったものもある。ここでは、目録に掲載されている発表の題目をそのまま紹介する。なお、紙数の関係上、一部省略しているが、分科会の名称は全て記載してある。

5. ユカタン州マヤパン遺跡の建築保存作業
6. シュカムボー—古典期マヤの行政センター・商業港—
7. ユカタン州ヤシュナー遺跡の球戯場グループの発掘

[シンポジウム：骨学—古代マヤ人の食事、健康、及び社会的不平等に関する新たな展望—]

1. コパンにおける不平等と伝染
2. ホンジュラスのコパンにおける食物と社会的地位—古典期のマヤ人における安定同位体の研究の結果—
3. 古典期崩壊期の食事制限から見た動物資源の獲得しやすさの差
4. 古典期後期におけるパレンケの都市住民の健康
5. 火器による外傷—イシル地域のアクルとチェルの事例—
6. チョルル周辺の埋葬

[自然人類学]

1. ユカタンのマヤ人の顔面表現型と生物学的同一性
2. メソアメリカの先スペイン時代の歯科学についての概念の現代化

[マヤ・アイデンティティをめぐる解釈]

1. マヤの概念—知識人、アイデンティティと国民—
2. ルイス・デ・リオン作品における葛藤のアイデンティティ
3. アティトラン湖のマヤ人のアイデンティティ

[コロニアル期の歴史]

1. マヤ地域の内と外—16世紀のアンティグア、シウダー・レアルとメリダー—
2. 16世紀のユカタンにおける教化と教育
3. インディオの宗教裁判と偶像崇拜の根絶—コロニアル期の辺境における1563年から1821年にかけての抵抗とアカルチュレーション—
4. 山地のインディオに教義を説いた司祭—マム人の中でのメルセス会の活動—
5. コロニアル期の視点から見たカシーケ—16世紀のシナカンタンの事例—

6. ユカタンのインディヘナの事例に見る啓蒙の理念
7. コロニアル期（1520-1720）のチアパス州の地方力学

8. 18世紀のヌエバ・エスパニャ東南部のルート、産物と市場

[シンポジウム：ボナムパック—古代のイメージとアイデンティティの根源—]

1. ボナムパックにおけるアグスティン・ビジャグラ—絵画的イメージのアイデンティティ—
2. ラカンハ地域のチャアン・ムアンI世とII世
3. ボナムパックの人物像の表現を通して見るマヤ・アイデンティティ
4. 岡という手段を通したアイデンティティの保持
5. アイデンティティの体系としての髪形
6. 現実の遊戯—ボナムパックにおける衣装—
7. ボナムパックと天への道

[シンポジウム：コスメル—あるマヤの島についての地理学的観点—]

1. あるマヤの島の地図作成法—キンタナ・ロー州コスメルの事例—
2. コスメル島の自然資源
3. コスメル島の地質の多様性と地理的単一性
4. コスメル島における居住の時間と空間の力学
5. 地理的空間に関するコスメルの住民の認識
6. コスメルにおける商業の特徴
7. コスメル島における集落の社会経済的様相の空間的光景
8. 20世紀終わりのコスメル島の観光の地理学・経済学的展望

[祝祭、儀礼と聖なる空間]

1. 古典期マヤ人の放血儀礼と共同体の精神
2. 誕生儀礼における蒸し風呂のシンボリズム
3. 誕生儀礼テエネック—マヤの慣習の追憶—
4. ユカタンの農村社会ツァンにおける祝祭、儀礼と近代性
5. ユカテカ・マヤ人のミルパの宇宙論的地理

6. 民族間を背景にしたツォツィル人の丘の神々

7. ラカンドン・マヤの宗教における予言の儀礼

8. サン・ロレンソの祝祭—メキシコのチアパス州ナベンチャウクとシナカンタンにおけるマヤ・アイデンティティの表現—

[全体会：マヤ・アイデンティティ—先スペイン期—]

[8月4日]

[聖なるものの力]

1. 神々の固有の数字と名前

2. パレンケの香炉の機能に関する特徴

3. イサマルのキニチ・カク・モの神殿

4. 聖なるもの前での王

5. マヤ地域におけるこうもりと吸血鬼—その宗教的シンボリズムへのアプローチ—

6. 地下世界の猫科動物

7. 冥界の信仰

8. 土でできた人間とトウモロコシでできた人間

[シンポジウム：マヤ世界における社会運動]

1. 民族的思考と社会闘争

2. マヤの戦いの神話としての自治

3. 社会運動の枠組みとしてのカルゴ・システム

4. チアパスにおける文字と先住民運動

5. チアパスの農民運動における農業紛争

6. メキシコにおけるグアテマラ難民社会におけるレクリエーションとアイデンティティ—抵抗か、あるいは新たな世界を作り出そうとする試みか?—

7. グアテマラにおける寡頭政治と社会運動—1960-1985—

[マヤ文学]

1. マヤ・アイデンティティと文学の創作

2. マヤ文学とアイデンティティ

3. 現代ユカテカ・マヤ人の詩の創作とアイデンティティ

4. ロサリオ・カステジャーノスとミゲル・アンヘル・アストゥリアスの小説におけるマヤ・アイデンティティの表現

5. アクバルと洞窟—マヤ語における文学の創作上の一対—

6. アルクセス、ショコヨレスとワイエス—キンタナ・ローにおける口承説話—

7. トウモロコシ—アイデンティティの食物— [シンポジウム：ユカタン半島における土地所有と先住民の労働]

1. ユカタンの盆地における土地所有と先住民のアイデンティティ

2. 平和な時代(1901-1936)における国民国家と先住民の領土

3. 1870年のユカタンにおける先住民の入会地の承認

4. 都市のマヤ人—チェトゥマルにおける雇用と家のまとまり

5. キンタナ・ローのマヤ人の労働空間と人口移動

[シンポジウム：コデックス・トロ＝コルテシアヌス(マドリッド絵文書)]

1. マドリッドのアメリカ博物館のコデックス・トロ＝コルテシアヌス調査計画

2. コデックス・トロ＝コルテシアヌスの書記—碑文研究の方法論—

3. コデックス・トロ＝コルテシアヌス—図像学研究の方法論—

4. マドリッド文書はどのようにして作られたか?—書記、色、遠近法と技術—

5. マドリッド絵文書に描かれたハアブと他の儀式

[シンポジウム：マヤの言語と文化]

1. ウスマシタの碑文と図像

2. 文化遺産の扱いのための計画—チアパス州ヤシュチランの事例—

3. カンペチェ州シカラングの供物の関係と意味

4. イツァムカブと男根崇拜

5. コロニアル期のマヤ文学の詩の手法

6. 40年代のマヤ世界の人類学的展望

[シンポジウム：ティカル—内的及び外的関係—]

1. 古典期前期のティカルの歴史についてのあ  
る解釈

2. 王朝の栄光と没落—古典期後期のティカル王家の分裂の過程—

3. マヤ低地における民族の実体と覇権国家—ティカルとカラクムルによる支配の政治的光景の再評価—

4. 女性と聖なる血—ティカルとトニナーの事例—

5. ティカルの主要な神殿の復元

[シンポジウム：法的多元論に向かって]

1. マヤ・アイデンティティー—世界観と法体系—

2. 先住民の法的自治

3. キンタナ・ローのマヤの伝統的権力機関についての国家の承認

4. 先住民の習慣—論争の解決のための代替手段—

[グアテマラとホンジュラスの考古学]

1. グアテマラのモタグア川中流域の考古学的調査—歴史文化的総括—

2. ヤシュハーの小核—技術上の研究—

3. グアテマラ南東海岸の複雑な社会—マヤ社会の境界における文化的発展と統合—

4. カミナルフューの先古典期後期における統治のイデオロギー

5. グアテマラのアグアテカの内地エリート集団

6. 古典期後期のチショイ川流域の不穏

7. 手工業の専門化と古代マヤ国家の形成—ホンジュラスのコパン溪谷出土の小型石器の使用痕の分析—

[全体会：コロニアル期のマヤ・アイデンティティ]

[8月5日]

[シンポジウム：グアテマラのペテン県のヤシュハー-ナクム-ナランホ文化トライアングルへのグアテマラ人類学歴史学研究所の関与]

1. ティカル、ナクム、ヤシュハー間の低地の農村居住地の文化的発展

2. ヤシュハー湖の盆地の一連の居住地

3. 文化トライアングル地帯における自然資源の特徴

4. ヤシュハー、トポシュテー、ナクムの三遺

跡の考古学的調査、復元と利用

5. ヤシュハー-ナクム-ナランホ・トライアングル地帯の地域計画の戦略

[シンポジウム：カラクムルにおける新たな調査]

1. カンペチェ州カラクムルの建物IIの墳墓4の上器の図像表現

2. カンペチェ州カラクムルの古典期の土器の化学的調査

3. 「蛇の頭の王国」の権力の中心

4. カラクムルの建物IIの墳墓4の材料の保存—埋葬習慣の新たな証拠—

5. カンペチェ州カラクムル考古学地区出土の埋葬用仮面の材料の分析と製作技術

6. カラクムルの墳墓4の人物の衣装の保護と解釈

7. カラクムルにおける碑文の調査

8. 生物文化的特徴の研究 カラクムルの事例

9. カラクムル、ツイバンチュー、コフンリッチにおける古食物の研究へのストロンチウム、亜鉛、カルシウムの適用

[チアパスの考古学]

1. チアパス州シミエントス・デ・ラ・インデペンデンシアにおける第三次考古学的発掘調査報告

2. チアパス州テナム・プエンテの墳墓10

3. チアパス州テナム・プエンテ出土の遺物

4. チアパスのマヤ人の西の境界

5. チアパス州トナラー地域の考古学的調査

6. カントン・エル・コラリート—チアパスの海岸のオルメカ遺跡—

7. チアパス州パソ・デ・ラ・アマダの非エリート住居の発掘

8. チアパス州ラガルテロのエル・リモナルの築山1

[シンポジウム：マヤ社会研究における復元の重要性]

1. 文化遺産とアイデンティティの概念

2. チアパス州ヤシュチランの考古学地区と自然遺物における保護のための総合計画

3. チチェン・イツァ考古学地区における保護

4. 復元がいかんにしてマヤ社会の調査に統合さ

れるか?

5. 建築要素と化粧漆喰の保護のための代替手段—キンタナ・ロー州コフン・リッチの損傷の発見と管理のためのモニター装置の利用—
6. チカンナーの石材加工の技術
7. チカンナーの石の損傷の問題の解決
8. エコ・ツーリズム計画下にあるボナムバックの保存の問題

[19～20世紀のユカタン半島の文化と社会]

1. 戦争におけるカスター—19世紀中葉のキンタナ・ロー州南部における民族性と闘争—
2. ユカタン半島における民族性と社会的不平等
3. ユカタン州チェマシュにおけるマセワル、ツルとインディオ
4. ユカタン半島のマヤ地域の住民の直轄地区の様相
5. ユカタン半島のマヤ地域における住民の空間移動
6. ユカタン半島における先住民の移住
7. ユカタン州メリダの植民地における幼児のアイデンティティ
8. ユカタン州サマヒルの細分区域間の商業化をめぐる組織と闘争
9. 「我々は町の発展に役立った」—キンタナ・ロー州中心部におけるマヤ共同体の田舎の教師と学校—

[グアテマラのマヤ人としての帰還—マヤ人の民族離散におけるアイデンティティと社会の推移—]

1. 想像上のアイデンティティ、深遠なアイデンティティとアメリカ合衆国へのマヤ文化の移動
2. 民族離散のマヤ社会における社会的リーダーシップ
3. チアパスでの16年間の追放の間のマヤ・アイデンティティの変化
4. 権力とアイデンティティの空間としての難民キャンプと文民巡視隊
5. 共同体の図書館とハカルテカのマヤ・アイデンティティ

[空間の分析]

1. ユカタン半島北部の先スペイン時代の石壁と居住組織
2. ユカタン州プウク地域における建築と空間の関係
3. イチ・ペア・トゥン・マヤパン—再調査された先スペイン時代のユカタンの古都の歴史—
4. ユカタンのマヤの住居の民族考古学
5. 低地マヤの都市の環境と空間の構造

[ジェンダーについての研究]

1. スペイン期の先住民女性の境遇
2. ユカタンにおける統合と女性のアイデンティティの推移
3. ユカテカ・マヤ人の女性の苦痛についての概念
4. 家族のネットワークと女性の移住におけるその重要性—ユカタンのテカンツの事例—
5. グアテマラのアルタ・ベラパスのチャハル地域の子供のジェンダーとアイデンティティ
6. 成長の方法の基礎としてのツォツィル人女性の経験知

[全体会：現代のマヤ・アイデンティティ]

[8月6日]

[シンポジウム：天文考古学とマヤ社会における時間と空間の構造化]

1. マヤ社会における「雷光=台形」記号の存在
2. マヤ暦の制御の手段としての天の川の観測
3. パレンケの宮殿の建築物Eの天文考古学的分析
4. 器60の分析と古典期マヤの地理空間の再構築のためのその関わり合い
5. ツォツィル人の村落シュルポーにおける聖なる空間

[シンポジウム：ベリーズ北部における考古学的研究]

1. ベリーズの先土器
2. 北部ベリーズにおける古代マヤの土地と水の利用
3. 王権の出現—ベリーズのチャン・チチの原

古典期の墳墓—

4. 形成期のカショブ—貝製装身具とアイデンティティ—

5. 先古典期後期の仮面計画の図像学—北部ベリーズの事例—

6. マアシュ・ナ調査計画—北西ベリーズの高地の遺跡における地域考古学—

7. ウケイ市にて

8. 北西ベリーズのブルー・クリークにおける最近の調査

[シンポジウム：ユカタン半島におけるリニッジと政治・領土的組織との相互関係]

1. 古典期前期の政治・領土的状況の中のプロウク

2. 「蛇の頭」のクチカバル

3. 考古学と歴史的資料—ウシュマルの事例—

4. イツァ人とその末裔—チキンチェルの商人—

5. カンペチェのシルビトゥク島における後古典期の社会組織

6. カヌル人とココム人—アフ・カヌル・スル地方からの考古学的アプローチ—

7. 16世紀ユカタンのイサマル地方

8. イツァ人とトゥトゥル・シウの遺産—ユカタン半島における先コロニアル期の政治組織の調査においてチラム・パラムの書はいかなる貢献をしたか?—

9. 16世紀のユカタンの支配リニッジの空間性

10. 古代の政治空間の再現

11. 創造神話と階級の歴史—コロニアル期のユカタンのチバルオブ—

[メソアメリカにおける隠喩]

1. 現代とコロニアル期のカクチケル語の隠喩  
2. 碑文・図像・民族誌上の資料におけるマヤ人の道についての隠喩

3. 反復と協カ—トホロバル語の演説におけるアイデンティティ—

4. トホロバル語における隠喩と変形

5. コロニアル期のミシュテカ語のテキストにおける隠喩の使用

6. 儀礼における議論的交渉の戦略としての今

日のナワトル語の隠喩

7. メソアメリカにおける変化についてのユート=アステカ語の隠喩

8. 隠喩と16世紀のナワ語の人名の変化における換喩

9. 日暮れと、夜明けに

[シンポジウム：マヤの言語とアイデンティティ]

1. 言語とアイデンティティ

2. 文化的・精神的局面における言語の維持

3. 民族のアイデンティティと地域のアイデンティティ

4. カクチケル語とスペイン語についての社会的評価

5. 接触と伝播

[シンポジウム：現代マヤの密林における古代の痕跡 エル・ピラルルにおける定住と環境]

1. エル・ピラルルにおける古代の居住の発達

2. エル・ピラルルにおける建築技術の発達

3. エル・ピラルルにおける古代と現代の景観

4. エル・ピラルルにおける記念建築物の保護についてのテーマ

5. 古代マヤ人が現代のマヤの密林に及ぼした影響

6. 居住についての予測可能なモデルとマヤの密林における資源利用のための環境

7. エル・ピラルルにおける持続可能な保護

[シンポジウム：ユカタンの社会的想像における社会主義化とアイデンティティの推移]

1. テティス聖堂における宗教的想像と宗教的アイデンティティ

2. クルソオブ・マヤの生活のサイクルにおける儀礼

3. 就学前の年齢の幼児におけるマヤ語の学習と使用

4. ユカタンのサイザル麻栽培地域におけるアイデンティティの変化

5. 焼酎、イデオロギーと服従 ユカタン南部におけるさとうきび焼酎の蒸留推進のための支配グループについての論考

[マヤ語の精神社会的様相]

1. チアパス州シナカンタンのツォツィル人の

子供との相互作用における社会主義化

2. ツォツィル人の会話における方言間の調節
3. 信念の形成における本能とイデオロギー—マム・マヤ人における活気のヒエラルヒーの事例—
4. テエネクにおける動物の名前の意味
5. ワステカ人の血縁関係のシステムの比較
6. ユカテカ・マヤ人との会話—コミュニケーションの物理的広がり—

[シンポジウム：民族の境界の再現]

1. グアテマラにおけるマシモンとサン・シモン崇拜—民族の境界を越えての往復—
2. ユカタンのカスタ戦争期前の時代(1821-1847)における罪についての民族的様相
3. 宗教的シンクレティズムにおけるマヤ—ユカテカ・マヤ人の事例—
4. 本質主義と保守主義—ユカタンのマヤ人の民族組織の政治的戦略—

[コロニアル期、近代、そして現代の芸術]

1. グアテマラの新古典思潮における先スペイン期の影響
2. グアテマラの現代絵画芸術における先スペイン的テーマの影響
3. クイラパンと開かれたマヤの教会礼拝堂
4. アリス・ディクソン・ル・ブロンジョンの写真を一瞥してのユカテカ・マヤ人の風俗描写の光景

[8月7日]

[碑銘学のテーマ]

1. 文字T128, T60, T609, T740, T522についての新解釈
2. 古典期のマヤ人の王朝と南部低地のリニッジ間のアイデンティティに関する表現
3. プエブラにおけるマヤの碑文
4. 岩と石碑

[シンポジウム：タバスコ州コマルカルコのチョンタル・マヤ人]

1. チョンタル・マヤ人の葬式—タバスコ州コマルカルコの「北の広場」の墳墓—
2. タバスコ州コマルカルコの「大アクロポリス」の儀式的状況下の先スペインの動物相

3. コマルカルコにおける神々と人間

4. コマルカルコの神殿IIの層位
5. コマルカルコの煉瓦

[シンポジウム：マヤ語の文法的局面]

1. ツトゥヒル語におけるhの変化
2. ユカテカ・マヤ語における接尾辞の構成
3. カンホバル語における一人称複数 of 標識
4. チュフ語における能格の領域—形態論と統語論—
5. 能格とマヤ諸語における動作主の抽出
6. キチエー語、カクチケル語、ツトゥヒル語における節の構造の統語論への除去の適用
7. ポコム語における節の構造の統語論への除去の適用

[ユカタン半島とベリーズの考古学]

1. 1998年期的カンペチェ東南部における考古学的調査
2. カンペチェ州カラクムルの土偶と楽器—その社会文化的及び化学的分類
3. 熱ルミネッセンス法による陶板の年代確定についての試み
4. マヤの生態考古学の法令—保護のための道具、文化遺産の研究と計画作成—
5. チェトゥマル湾におけるマヤ人の漁労
6. ベリーズにおける農耕への先史時代の転換
7. 考古学上の解釈における略奪の問題—カムペチェ州オルミゲーロの事例—
8. キンタナ・ロー州コバーの球戯場における最近の発掘

[シンポジウム：ユカタンにおける集団のアイデンティティの形態の場所と推移]

1. 言語とアイデンティティ—変化の過程におけるマヤ語とスペイン語—
2. マヤ人かあるいは農民か?—他者から見た光景
3. 自分の財産と他人の財産—ユカタン半島のマヤ社会における発展計画への参加—
4. ユカタンにおける民族的抵抗と権力—カンショクにおける事例研究—
5. 聖なる空間—アイデンティティの砦—
6. 処女と偶像—ユカタンのシュカムボ考古学地域におけるアイデンティティと領土—



[シンポジウム：政治・宗教的組織]

1. アイデンティティの要素としての政治・宗教的組織の基本
2. マヤ地域におけるカルゴ・システムとそのメソアメリカ的背景—古い問題、新しい理論—
3. 権力関係の通時的枠組みにおけるマヤの伝統宗教
4. 16世紀ユカタンにフランシスコ会修道士によって植え付けられた宗教構造とユカタン半島のマヤ人とのその影響

[今日のチアパスとグアテマラ]

1. シナカンタンとチャムラのツォツィル人の社会的発展
2. マヤ・アイデンティティと新たな現実
3. チアパスのマヤ人の暴力とジェンダー
4. チアパス高地のマヤ人の文化的アイデンティティと社会政治的問題
5. 新たな文明の地平の創造におけるマヤ人チアパスともう一つの近代
6. ラカンドンの密林におけるアイデンティティ

イの様相—植民地主義からエコツーリズムへ—

7. 村落の変化と社会文化的変化—メキシコとグアテマラの先住民地域の比較—
  8. マヤ人、避難地、帰還—新しい平和の民—
  9. トホラバル高地における土地所有と農業
- [図像学とマヤ・アイデンティティ]
1. ユカタン半島東部における二つの文化の影響
  2. マヤ地域とテオティワカンとの間の文化的関係に関する新しい壁画・土器資料
  3. 外部から見たマヤ・アイデンティティ—オアハカの事例—
  4. ククルカンはニカラグア北部で生きていた—翼のある蛇の図像学と象徴図像学—
  5. トルテカ人、イツァ人と古典期マヤ人
  6. 神話上のマヤ・アイデンティティ—古典期と後古典期におけるウチとソト—
  7. 紋章文字についての一つの解釈
- [全体会：生命の紛失—死のマヤ・アイデンティティ—]